

令和4年9月2日
第587号

今月の技術

農政部 農業経営課

目次

気象災害等を踏まえた農作業のポイント	1
1 土地利用型作物	2
2 野菜	3
3 果樹	4
4 畜産 ～ 台風対策 ～	5

気象災害等を踏まえた農作業のポイント

これまでの気象経過

◆ 7月下旬～8月中旬の概要

岐阜地方気象台速報

7月下旬は、高気圧に覆われ晴れた日が多くなったが、低気圧や前線の影響で曇りや雨となった日もあり、雷を伴い非常に激しい雨となった所があった。また、28日未明には山県市北部付近では、解析雨量で1時間に約110ミリの猛烈な雨が解析された。

平均気温は、岐阜は平年並、高山は高くなった。降水量は、岐阜、高山ともに平年並となった。日照時間は、岐阜は多く、高山は平年並となった。

8月上旬は、高気圧に覆われて晴れとなった日があったが、上空の寒気や湿った空気の影響により曇りや雨となった日が多く、雷を伴い猛烈な雨となった所もあった。

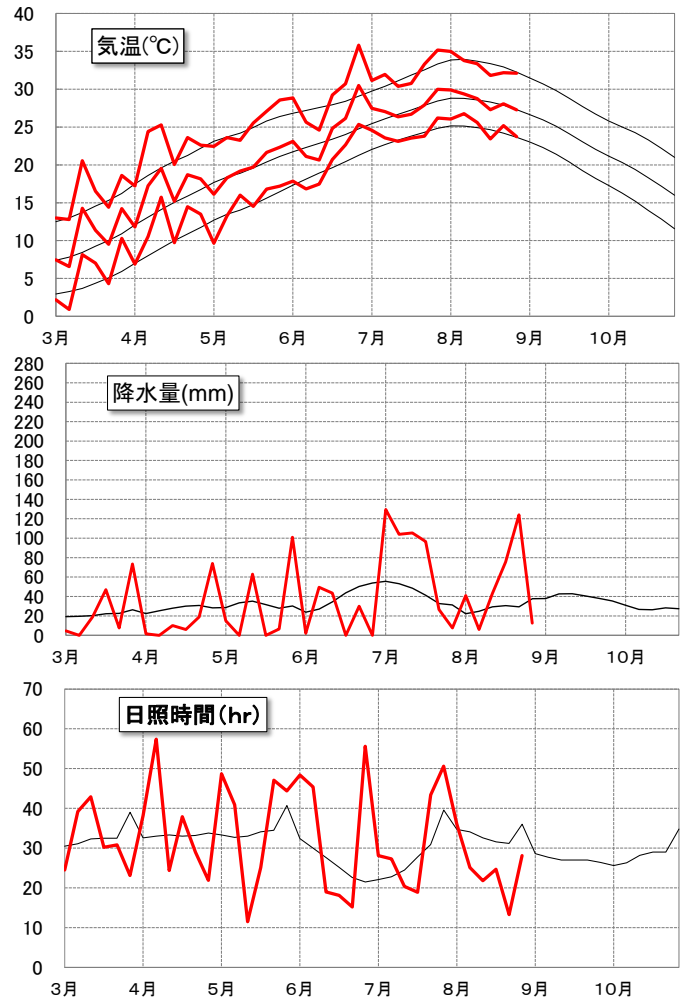
平均気温は、岐阜、高山ともに高くなった。降水量は、岐阜は多く、高山は平年並となった。日照時間は、岐阜、高山ともに平年並となった。

8月中旬は、高気圧に覆われて晴れとなった日もあったが、前線や台風第8号及び、暖かく湿った空気の影響により曇りや雨となった日が多くなり、雷を伴った非常に激しい雨となった所があった。

17日から18日にかけて前線の影響により

所々で大雨となった。平均気温は、岐阜、高山ともに低くなった。降水量は、岐阜、高山ともに多くなった。日照時間は、岐阜、高山ともに少なくなった。

2022年 夏作半旬気象図(岐阜市)



< 平年：細線（黒）、本年：太線（赤）>

今後の気象予測

◆ 東海地方1か月予報 9月3日～10月2日までの天候見通し

名古屋地方気象台9月1日発表

暖かい空気が流れ込みやすいため、向こう1か月の気温は高い見込みである。

週別の気温は、1週目は平年並みまたは高い確率ともに40%である。2週目～4週目は高い確率50%である。

週別の天候見通しは次のとおりである。1週目の天候は前線や湿った空気の影響を受けやすいため、雲が広がりやすく、雨の降る日がある見込みである。2～4週目の天候は数日の周期で変わる見込みである。

1 土地利用型作物

○水 稲

(1) 生育状況

5月以降の気温は平年並み～高めで推移したため、生育は平年並み～やや早くなっている。平坦地の早期植え「あきたこまち」の出穂期は平年より1週間程度早く、既に収穫も終了している。中山間地域でも収穫が始まったところであるが、一部では倒伏や、いもち病の発生等も見られる。

(2) 収穫作業

秋の長雨など雨の合間に収穫作業を行うことになる場合は、乾燥能力に併せて収穫を行い、収穫後は速やかに乾燥させ、品質低下を防止する。乾燥時は、無加温の通風乾燥から開始し、徐々に加温し穀温40℃以下で乾燥させる。急激な乾燥は胴割れの原因となり、品質・食味が低下するので行わない。また、倒伏や穂発芽等の被害を受けた場合は、必要に応じて分別し、品質低下を防止する。

(3) 適期収穫

出穂後の積算温度を目安としているが、積算温度のみに頼らず、登熟の進み具合をほ場で確認し、的確に収穫を開始する。帯緑籾割合が5～10%程度で確実に収穫・乾燥調製された米は、胴割れも少なく、玄米特有のツヤを有し、良効な外観品質を保つことができる。

経営規模が大きいこと等から計画的な収穫作業を行う必要がある場合には、収穫の作業規模を考慮し、帯緑籾割合が15%になった時を収穫の開始時期とする。帯緑籾割合が5%を下回ると、地域によっては刈り遅れとなり、胴割米や茶米が多くなるため注意が必要である。

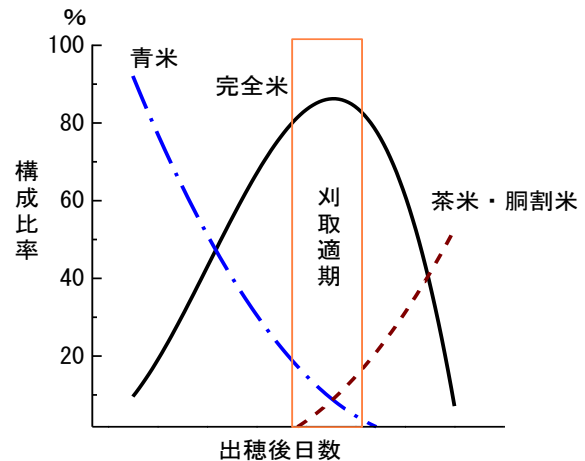


図 収穫時期と玄米品質

(4) 水管理

大型収穫作業機の作業性を確保するために早期落水をする場面もみられる。中干しが十分にできなかった場合や土壌条件によっては早期落水の必要性も考えられるが、早過ぎる落水は米の品質低下にも影響する。ほ場が乾き天水頼みで雨が降らず、止葉が黄化してしまう事態にならないよう、用水に水が来なくなる前に必ず通水（または湛水）をして土壌水分を維持しておく。近年は9月以降も気温が平年並から高い傾向が続いており注意が必要である。

○大 豆

(1) 播種状況

梅雨明けは平年より早かったものの、7月以降は雨天も多く、播種作業は8月に入っても続いた。局地的に豪雨となった地域もあり、圃場の冠水などで出芽不良となる圃場も見られた。

(2) 灌水

大豆は湿害に弱い反面、水分要求量が大きい。根粒は大豆より水分不足に弱く、開花期以降に水分不足になると窒素固定能力が大きく低下する。開花期以降乾燥が続く場合は、開花期の畝間灌水が効果的である。ただし、長時間にわたり水が停滞すると逆効果になるので、確実に排水できるようにしたうえで、2時間以内の滞水を目途に行う。

(3) 病害虫

大豆生産における不安定要因は、

①生育初期：大豆特有の初期生育不良による生育全般への影響

②開花登熟初期：夏場の高温によるカメムシ吸汁による青立ち

③登熟後期：秋の高温・不良天候による腐敗粒等の品質低下

などに整理される。

それぞれの生育時期に発生しやすい病害虫に注意し、適切な防除を実施して良質な大豆生産を行う。これから平坦地域ではハスモンヨトウの被害が発生しやすくなるので、今後の動向に注意する。特に白化葉（幼虫の食害）が見られ食害も拡大している場合には、手遅れにならないよう早急に対策を行う。

○麦 類

(1) ほ場準備

本県は平坦地から中山間地山沿いまでの地域を含み、地域によっては播種可能日が制限されるので、降雨後すぐに作業が開始できるように排水対策の徹底を図る必要がある。

地表水の排除・透水性の改善・地下水位の低下等、排水対策は麦類の安定栽培における必須要件であり、前作の水稲収穫から麦播種までの期間が、ほ場の排水性を図るための貴重な作業期間となる。明渠、弾丸暗渠は水稲収穫後なるべく早く土壌が乾いた時期に行い、乾田化を図る。水稲の収穫が終了した圃場については、晩生品種の収穫終了を待たず、麦作を予定する圃場の排水溝施工を先に進めるようにする。

2 野 菜

(1) 高温対策

温暖化の影響で秋になっても高温が続く年が多くなり、生育が早まったり、花芽形成の遅延が発生することが多くなっている。気象庁の季節予報などを確認し、高温への対策を行う。

①高温による影響

a. 30℃以上の気温になると施設内では高温状態になるため、障害が発生しやすい。

b. 高温が続くと植物の呼吸量が増え、樹勢の低下がおきやすい。

c. 果菜類では、着果不良、生理障害、病害虫の発生により収穫量・品質が低下する。

d. 葉菜類では、高温乾燥により葉先枯れや生育不良が出やすい。

e. 高温で多湿状態では、疫病やピシウムなどによる病害が発生しやすい。

②高温対策

a. 高温を抑制するため、ハウスでは換気を行うとともに、作物の光要求性に応じて、遮光資材などを使用する

- b. 果菜類などは、樹勢回復のため追肥（葉面散布材）を行うとともに、換気で夜温を下げる。
- c. 葉菜類では、かん水不足（ムラ）をなくし、場合に応じて微量要素の追肥を行う。
- d. 高温多湿環境が続く場合は、疫病対策のため、農薬による防除を行う。
（台風通過後も同じ対策）

(2) 強風・台風対策（施設野菜）

台風シーズンに入るが、対策は台風の進路や大きさによって、事前対策や被害に応じた事後対策を行う必要がある。しかし、日頃から対策を行っておくことで、ある程度被害を軽減することが可能であるため、以下の準備を行っておく。

① 日頃から行う対策

- a. ハウス周りに資材等が散乱していると、強風によりハウスに当たって被覆資材が破損し、そこから強風が入ってハウスを吹き飛ばすため、ハウス周辺の整理整頓を行っておく。
- b. ハウス部材のサビや破損がないかを定期的を確認しておき、問題があれば修繕を行っておく。また、機器等は作付け開始前など1年に1回は点検を行っておく。
- c. パイプハウス等は、筋交いを入れて補強したり、風によるハウスの浮き上がりを防止するためアンカーを強化しておく。

② 事前対策

- a. 出入り口の施錠ができる場合はカギを閉めておき、カギがない場合は、強風で外れないようにビニル等で補強し風が入らないようにする。
- b. 換気窓の自動開閉装置、暖房機などは電源を切っておく。また、換気扇がある場合は、換気扇のみ（吸入口は閉じておく）稼働し、ハウス内の気圧を下げて被覆資材の浮き上がりをなくし、強風によるバタつきをなくす。強風がおさまったことを確認したら、換気扇は早めに止める。

③ 事後対策

- a. 台風通過後はハウス周辺を見回り、破損箇所があった場合は補修する。
- b. 換気窓の自動開閉装置や各機器類の電源をもとに戻し、ハウス内の気温上昇を防ぐ。
- c. 強風によりビニルや防虫ネットの破損があるか確認し、破損している場合は直ちに補修する。特に微小な害虫は、小さな破れや穴があるだけでハウスへ侵入し作物を犯すので十分気をつける。
- d. ハウスビニルの破損が激しい場合は、専門業者に連絡してすぐに修繕してもらう。

3 果 樹

8月以降、気温はやや高く、適度に降雨と日照時間のある状況が続いている。収穫期まで健全な樹体を保てるよう、引き続き排水対策や灌水の徹底等により土壌環境が急激に変化しないよう対策をとる必要がある。

8月に入り、平坦地のナシ「幸水」、高冷地のモモ「白鳳」の収穫が本格的に始まった。いずれも開花期以降の高温の影響で収穫期は平年より早くなり、産地によっては盆前需要に対応できた。ナシは収穫直前が高温でやや日照不足であったため、直前で着色がやや遅れたが、着果量はやや多く、昨年多かった黒星病の発生も少なかったため、良好な作柄となっている。モモは昨年並みに大玉傾向であった。平坦地のカキ、高冷地のリンゴは果実肥大期となっており、いずれも平年をやや上回る肥大推移となっている。中山間地のクリは主力品種「丹沢」「筑波」の着果量はやや少ない傾向となっている。

8月上旬から、平坦地では果樹カメムシ類のトラップへの誘殺量が増加傾向となつて

いる。今後も気温が高い状況が続き、台風や風雨により餌であるスギ・ヒノキ毬果の劣化が進めば、果樹園に飛来することが考えられるため、園内の飛来状況を常に確認し、発見次第防除徹底を図る。(8月30日 美濃地域に果樹カメムシ類注意報発表)

カキは昨年、多発した炭疽病の感染時期となるので、発生の見られる園では耕種的・薬剤防除の徹底を図る。

表1 主力果樹の果実肥大(単位:cm)

樹種	カキ「富有」	ナシ「幸水」	モモ「白鳳」	リンゴ「ふじ」
調査日	8/25	8/15	7/27	8/24
R4	(果周) 22.6	(果周) 31.2	(縦径) (側径) 7.42 8.00	(縦径) (側径) 7.32 8.09
R3	22.3	—	6.80 7.77	6.45 7.26
平年値	21.7	29.4	6.84 7.08	6.69 7.41

※カキ、ナシは農業技術センター、モモ、リンゴは中山間農業研究所

表2 8/25時点のカキの着色状況(カラーチャート値、農業技術センター)

	R4	R3	R2	R1	H30	H29	平年
早秋	1.8	2.2	1.3	1.1	1.5	1.3	1.5
太秋	0.8	0.8	0.5	0.6	0.7	0.6	0.7
富有	0.3	0.4	0.1	0.1	0.2	0.3	0.3

○台風対策

台風襲来の時期となる。近年、大型台風の発生も多いため、事前対策を十分に行い、被害を軽減する必要がある。事前対策、事後対策の詳細については、台風対策情報を参考に、日頃から台風対策を意識して管理していただきたい。

4 畜産 ～台風対策～

(1) 飼料作物

① 事前対策

- ・天候に応じ、迅速に管理・収穫作業等が行えるよう、共同作業の体制等の準備を十分整えておく
- ・台風の進路等に当たると予想される場合には、収穫適期に近づいているものや収穫適期に達していなくとも、飼料用トウモロコシなどで糊熟期以降であれば、被害軽減のために収穫作業を一部前倒して開始することも検討する。
- ・転換畑等で排水状態が悪いほ場では、湿害による生育不良や機械作業性の低下が起きるので、排水溝の点検など速やかに排水対策を講じる。

② 事後対策

- ・トウモロコシなどの長大作物については、倒伏すると収穫量が減るとともに品質も低下するため、倒伏した場合には早めに収穫し、サイレージ調製に努める。
- ・ある程度草丈が伸びている河川敷草地や転換畑などの牧草については、泥砂を伴った濁水による冠水があった場合、天候やほ場の回復を待ち、濁水に浸かった牧草を刈り払い、除去して、次番草の生育促進を図る。なお、濁水の冠水により

除去した草は、牛に給与せず、次期作を前倒しした作付けや稲わら等の農産副産物の確保等により、良質な粗飼料の確保等に努める。

- ・やむを得ず品質が低下した飼料を収穫し、サイレージに調製する場合には、乳酸菌製剤等を添加するなど、品質の低下を軽減するよう努める。また、必要に応じてカビ毒や栄養成分の分析を行うとともに、栄養価、嗜好性等にも配慮し、家畜の生産性が低下することのないよう注意して給与をする。

(2) 家畜と畜舎

① 事前対策

- ・突風に備え、畜舎の扉、窓等の点検補強を事前に行う。同時に浸水対策として畜舎廻りの排水溝や樋の点検清掃による排水対策を行い、畜舎・堆肥舎への雨水流入を防ぎ、清潔な畜舎環境の維持に努める。また、畜産関係車両の搬入路の亀裂等も確認しておき、万が一通常の搬入路が使えないときの対応を検討しておく。
- ・飼料は倉庫・畜舎内に入れ、雨水がかからないようにする。また、山間部においては、冠水や道路の寸断などで、畜産関係車両の通行ができないときに備え、飼料や燃料は、余裕をもって1週間以上、家畜を飼養できる在庫量を確保する。
- ・停電に備えて必要な発電機等の準備(リース、試運転等)をしておき、搾乳作業やバルククーラーの冷却、畜舎内の換気・空調等に支障のないよう万全を期す。
- ・汚水処理施設は大雨により水位の上昇が起こるので早めに排水対策を行い、水位を一定に保つよう努める。

② 事後対策

- ・機械への通電を再開する際には漏電やショートに留意する。
- ・台風通過後は、急激に気温が上昇することがあるので、特に肥育豚及び出荷前のブロイラーでは畜舎の開放や空調の電源を確認する等、畜舎の温度が上昇しないように努める。
- ・畜舎等が浸水した時は速やかに排水対策を取るとともに、通気を良くし、内部の消毒、乾燥を行い疾病等の防止に努める。
- ・踏み込み消毒槽は雨水や泥が混入すると殺菌効果が弱くなるため、点検頻度を増やし早めに消毒薬を交換する。